

大空に咲く パラグライダーの花



「私は子供の頃
平泳ぎで空飛ぶ
夢をよく見ました」

「そのせいでしょうか」

作画 西島淳之介



「天草郡有明町
生まれの海育ち
でした」



「天空へのあこがれを
ずっと抱いていました」



「いつの日か
この大空を
自由に飛んで
みたいなあ」



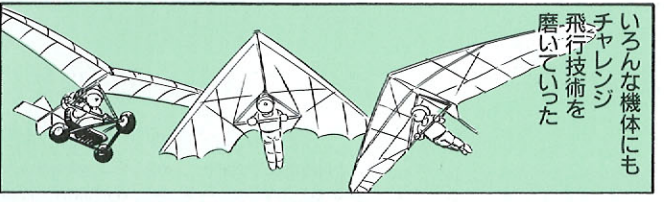
「見事独学で
ハンググライダーを
マスター」

「やったあ」

阿蘇・九重の山々を
飛び回った

自称
空飛ぶ
マジシャン

「さあ」



「いろんな機体にも
チャレンジ
飛行技術を
磨いていった」



「そして昭和六十年
八代で行なわれた
航空祭のこと」

「これは
面白いものが
登場したなあ」

「ほー」



昭和四十九年
アメリカから
ハンググライダーの
プロが来日

「それ語るのには現在
俵山パラグライダー
スクール火の鳥の鳥の
校長山本賢さん」



「人懐っこい
コヤマケン
さん」



「これなら
オレにも
出来るはず」



「と思ったものの
当時日本では
手に入るはずも
なく」

「アメリカ
ロサンゼルス
まで買いに
行きました」



本職は
建築業

「しかし休日
はせつと山通い」

「あー
たっ
たっ
たっ
たっ
たっ」

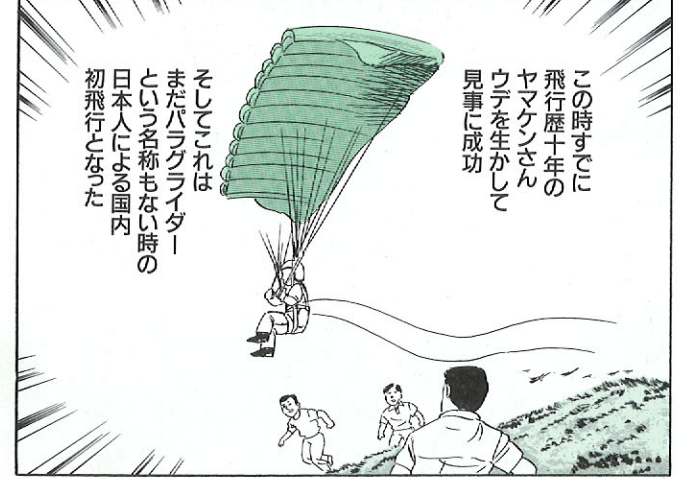
「あー
たっ
たっ
たっ
たっ
たっ」



「まてよあれで
ハンググライダー
のように
斜面から飛べ
ないうろが」

「ヒラキ
」

「とここで
阿蘇山で
いきなりのチャレンジ」



「この時すでに
飛行歴十年の
ヤマケンさん
ウテを生かして
見事に成功」

「そしてこれは
またパラグライダー
という名称もない時の
日本人による国内
初飛行となった」

「これは
いい
いい
いい
いい
いい」



「改良が進めば
誰でも手軽に
空を飛べるに
違いない」

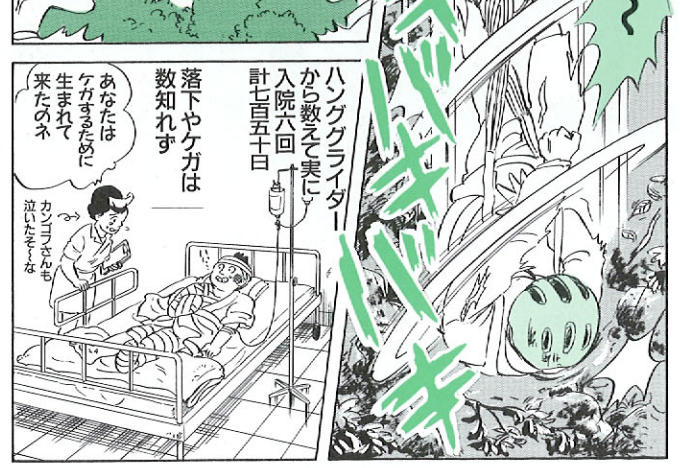
「半年後には
パラグライダー
「火の鳥」を開発
予想は当たり
あつた間に
パラグライダー
愛好者は
全国に増えていった」

「これが今の
ヤマケンさんの
喜びだ」



「お前は生かされて
いるんだ。そろそろ
人のためになることをやれ」

「何度か死にかけ
生き返った私は
そんな天の声を聞いたらうな
気がしていました」



「またまた
ヤマケンさんが
死んだぞー」

「ハンググライダー
から数回入院
計七百五十日
入院六回
落下やケガは
数知れず」

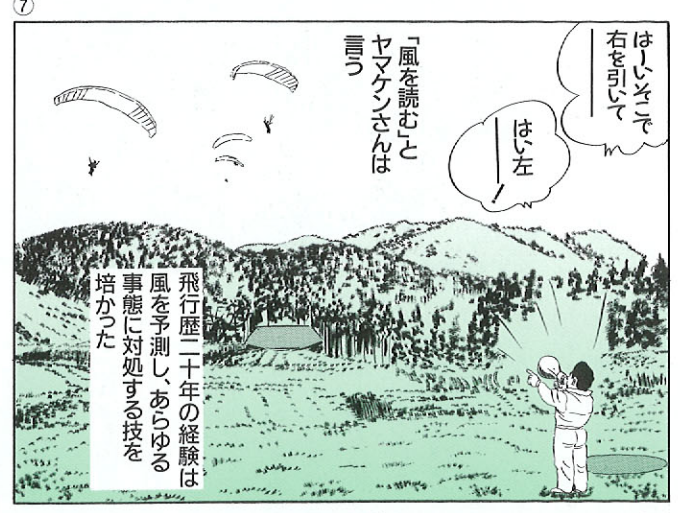
「あなたは
ケガするたびに
生まれて
来たのよ」



「うーむ
やはりあそこには
危険なローターが
あつたか」

「よし次は
あそこを
あそこを
あちの山で」

「次々と新たな
空にチャレンジ
」



「はい左
右を引いて」

「はい」

「風を読む」と
ヤマケンさんは
言う



「その能力を生かし
たくさんの人々に
スカイスポーツの
楽しさを伝える」

「今や
日本全国から
フライヤーが
やって来ます」



「これは今の
ヤマケンさんの
喜びだ」

「歌手 森川由加里
女優 大堀久美子
元プロテニスプレーヤー 佐藤 直子
人生観 変りました」



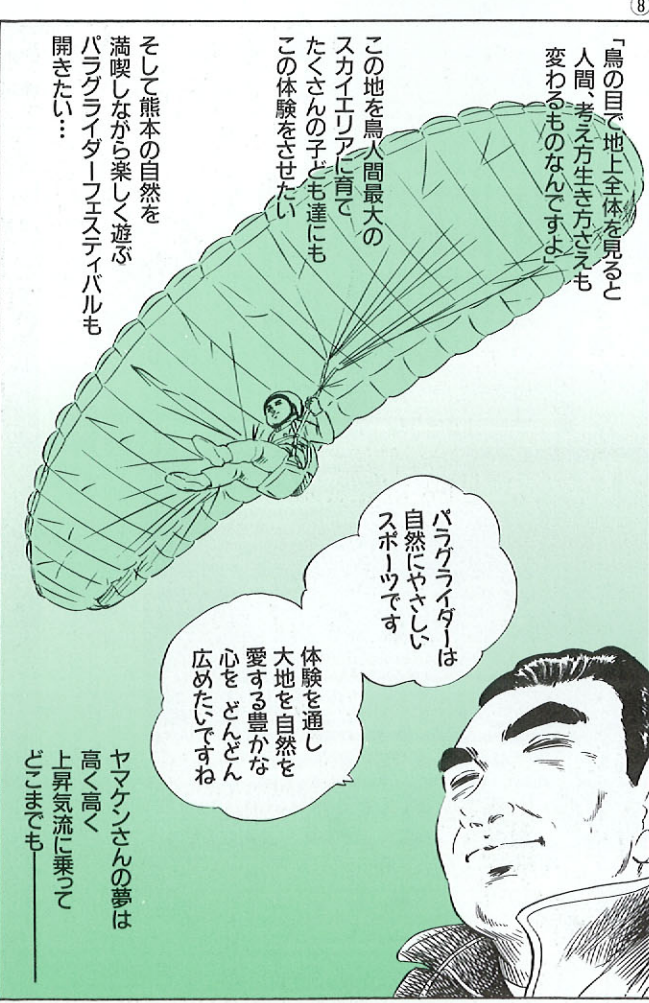
「南面の地形
風向き……
まさに天然の
良港」

「子供からお年寄り
初心者からベテランまで
安全に楽しく
フライト出来る
場所を捜して
いたのだった」



「思い立ったら
即行動のヤマケンさん
俵山に土地を借り二部講堂
自力でランディング場付き
クラブハウス
「アイルランド俵山」
建ててしまった」

「よし、
会社をたたんで
ここに引っ越し住む
ぞー」



「鳥の目で地上全体を見ると
人間、考え生き方さえも
変わるものなんです」

「この地を鳥人間最大の
スカイエリアに育て
たくさんの子とも達にも
この体験をさせたい」

「そして熊本の自然を
満喫しながら楽しく遊ぶ
パラグライダーフェスティバルも
開きたい」

「パラグライダーは
自然にやさしい
スポーツです」

「体験を通し
大地を自然を
愛する豊かな
心をどんどん
広めたいですね」

「ヤマケンさんの夢は
高く高く
上昇気流に乗って
どこまでも」